# 序章　60歳からの伝言──風水という未来技術へ

## 0-1 風水建築士という現場からのメッセージ

60歳という年齢を迎えた今、私は未来に向けてひとつの「伝言」を残したいと思うようになりました。

それは、風水を「過去の迷信」ではなく「未来の技術」として再定義する挑戦です。

風水として、そして宅建士・建築士として三つのライセンスを持つ私は、「氣を見る目」「法を読む力」「形にする技術」を合わせて、空間づくりに関わってきました。

この立場から見える現代社会のあり方、そして風水が果たすことのできる役割は、決して占いや迷信の範疇に収まるものではありません。

かつて風水師は、天文と地理を読み解く専門家として、医師や学者と並ぶ高度な知識人でした。

国家の都や陵墓、寺院の設計に関わり、時には国の命運を左右する存在でもありました。

それがいつしか迷信と見なされ、現代では正当な評価を受けることが難しくなってしまったのです。

私の挑戦は、個人的な話で終わるものではありません。

これは風水業界への問いかけであり、これから風水に関わる人たちへの道標でもあります。

不動産や建築に関わる専門職の方々、そしてエネルギーや量子、空間といった領域に取り組む科学者たちに向けた、橋渡しのメッセージでもあるのです。

風水という言葉が、もう一度社会の中で評価され、科学の進歩とともに「氣が通う空間」の価値が再認識されることを願って、この本を書き始めたいと思います。

## 0-2 過小評価される風水

現代の日本では、「風水」という言葉にはどこか軽く見られるような印象があります。

雑誌の占いコーナーやテレビの開運特集などで、インテリアの方位やラッキーカラーが独り歩きし、本来の思想や体系から離れた「なんとなくの風水」が広まってしまいました。

しかし、本来の風水は、そんな浅いものではありません。

古代中国において、風水師は天文と地理を読み、帝王の都や陵墓の位置を定める重要な役割を担っていました。

風水の知識体系は、天体の動き、地形、水脈、方位、陰陽五行、気候や風土といった複数の要素を組み合わせ、自然と人の営みの調和を目指す「環境設計の学問」でした。

それが近代以降の合理主義や科学至上主義の中で「迷信」とされ、表面的なイメージだけが残ってしまったのです。

その結果、本来こそ風水が活かされるべき建築や都市計画といった場面から遠ざけられ、風水に触れただけで「非科学的」とレッテルを貼られるようになってしまいました。

さらに現実的な問題として──

風水だけの収入で生活できる人はごく一部に限られます。

多くは占いやスピリチュアルを主な活動としながら、風水を副業的に扱っているのが現状です。

建築や不動産の知識を持たずに助言をするケースも多く、その助言も「なんとなく」な印象を拭えないまま高額に提供されることが少なくありません。

依頼者の側からすれば、「根拠も曖昧なのに費用が高い」と不信感を抱いても無理はありません。

この構造自体が、風水の社会的評価を下げている大きな原因の一つです。

しかし私は、風水とは本来「巨大な龍」のように、深く広い理論体系を持つものだと確信しています。

実際、風水を学術的に研究してきた国学院大学の渡邊欣雄名誉教授は、著書『風水 気の景観地理学』の中で次のように述べています。

「風水思想は、あまりにも巨大な〈龍〉でありすぎた」

「こんにちのタコツボ型の専門研究だけでは、風水思想の全貌は理解できない」

この言葉は、風水が単なる迷信や占いではなく、天文学・地理学・建築学・環境学・民族学・文化人類学など、さまざまな分野を横断する壮大な思想体系であることを示しています。

渡邊教授をはじめとした研究者たちは「全国風水研究者会議」に集まり、それぞれの立場から風水を読み解く共同研究を重ねています。

にもかかわらず、現代日本では、こうした学術的な風水にはほとんど注目が集まらず、占いやスピリチュアルと一括りにされてしまっているのが現実です。

加えて、そのようなサービスが高額で提供されることで、「根拠のない高額なサービス」として、風水そのものへの不信感を招いているのです。

しかし、本当の風水は違います。

自然科学の視点と思想哲学が交わり、人と空間と環境が結びつく設計思想として、今こそ再評価されるべきではないでしょうか。

風水師として現場に立ってきた私自身、「風水って、根拠のないことを信じているんですか？」と、嘲笑まじりに問われたことがあります。

あるいは、「お守り程度に聞いておきますね」と軽く受け流された経験もあります。

本当にそれでよいのでしょうか。

私が携わってきた多くの空間では、氣の流れを無視するとどこかに歪みが生じ、自然の理に沿った場所には不思議な安定感と力が宿っていました。

これは決して思い込みではありません。

自然の摂理と人間の心理が交差する「氣の場」は、私たちが無意識に感じ取っている「何か」の正体そのものです。

風水の本質は、「当たる・当たらない」というレベルの話ではありません。

自然、人、空間が共鳴し合うための設計思想──

それこそが風水の真の価値なのです。

そして私は、その価値を現代社会の中にもう一度蘇らせたいと考えています。

## 0-3 風水を未来技術に

風水は、古代から自然と人の調和をはかり、氣の流れを整えることで暮らしや運命を安定させようとしてきた思想です。

一見すると古びた過去の知恵、あるいは古代の叡智のようにも思えるかもしれません。

しかし私にとって、風水は過去の遺物ではありません。

それは「未来の技術」なのです。

現代の科学技術は、目に見えないエネルギーや微細な構造を捉えられるようになりました。

量子力学では「観測が現象を変える」ことが示され、心理学や脳科学では、人の無意識が空間に敏感に反応することが明らかになっています。

こうした考え方は、風水が何千年も前から語ってきたことと通じます。

氣の流れを読み、空間の形や向きが人に与える影響を理解する。

自然と人と空間を一体として設計するという思想。

これは、現代科学がようやく言語を与え始めた世界と一致しているのです。

そもそも、現代科学も古代の観察と探究から始まりました。

太陽や星の動き、季節の移ろい──こうした自然の観察が、時間や法則という概念を育ててきました。

風水もまた、同じく自然の観察から生まれた環境設計の理論体系です。

最近では、植物を発光させて照明に使う研究も進んでいます。

大阪大学の実験では、タバコの葉を光らせることで、将来的には生命の力で空間を照らす可能性も模索されています。

こうした生命と空間の融合は、まさに風水が追い求めてきた方向と一致します。

テクノロジーとスピリチュアル、科学と古代思想が融合する時代において、風水の本質が再び現れようとしています。

これからの建築や都市づくりでは、氣の理を理解し、それを空間に活かせる人材──風水建築士の存在が、ますます重要になると私は信じています。

## 0-4 なぜ今、風水建築士なのか

風水建築士──この言葉は、一般にはまだ聞き慣れないものかもしれません。

風水師と建築士は、まったく別の職業だと考えられているのが普通です。

むしろ両者は対立する考え方にある、そう思われがちです。

風水師は目に見えない「氣」や感覚を重んじ、建築士は構造や法規、合理性を重視します。

この違いから、風水のアドバイスを望むクライアントが、

「設計士にどう伝えたらいいかわからない」

「否定されそうで言い出せない」

と戸惑う姿を、私は何度も目にしてきました。

一方、建築士の側も「非科学的な考えを設計に持ち込みたくない」と距離を置く傾向があり、その間で両者の信頼関係がうまく築かれない現場も多く存在します。

しかし、家はただの箱ではありません。

性能や機能をどれほど追い求めても、そこに「氣」が通っていなければ、人は本当の意味で安らげないのです。

事実、理論上は完璧なはずの住まいで、不調や不和が生じる例もあります。

そうした現場に接する中で、私は決意しました。

風水師として氣を読み、宅建士として土地と法を理解し、建築士としてそれを「かたち」にする。

この三つの視点を持ち、それらを統合できる人間が必要なのだと。

そのような立場こそが、「風水住宅を建てたい、住みたい」という人々の希望を、理論と感性の両面から支えることができるのです。

それが、私が掲げてきた理念であり、実務の根幹となる

「相（風水師）× 法（宅建士）× 創（建築士）」という新しいアプローチです。

風水を迷信として退けるのでもなく、建築を感覚だけで揺るがすのでもなく、その両方を理解し、橋をかける立場こそが、現代社会において本当に求められているのではないでしょうか。

私は風水建築士という立場を、誰かに与えられたものではなく、社会に必要だと信じて、自ら築いてきたつもりです。

そして今こそ、「氣と法と創造」を統合するこの視点が、人々にとって「本質的に豊かな空間」とは何かを問い直す、ひとつの鍵になると信じています。

## 0-5 次世代への伝言

60歳を迎え、私はもう一度、風水と建築の道を歩き直しています。

歳を重ねたからこそ見えてきたもの、本質に気づけたことが、確かにあるのです。

この章は、これからの時代を担う人たち──

風水を志す者、建築や不動産に関わる者、そして空間の可能性に魅了されたすべての人たちへの「伝言」です。

今、風水の世界は分断されています。

一方には、占いやグッズに偏った大衆的なイメージ。

もう一方には、学術研究に閉じた理論。

その中間に、「現場で活かせる風水」がほとんど存在していないのが現状です。

建築の世界も、性能や合理性ばかりが追求され、人間の感性や氣の流れといった非物質的な要素が切り捨てられてきました。

しかし、未来をつくるのは技術だけではありません。

思想と哲学がなければ、空間はただの箱に過ぎません。

私は風水を、「思想 × 現場 × 社会」の交点に立たせたいと思っています。

それが「風水建築士」という新たな立ち位置であり、単なる設計士でもスピリチュアリストでもない、社会に氣を通す存在としての役割なのです。

もちろん、すべての風水師が占いや感覚頼りなわけではありません。

真摯に取り組み、命理や方位に加えて地形や構造に詳しい人もいます。

ですが、なぜ風水師は建築の知識を取り入れて新たな道を拓こうとしないのでしょうか。

なぜ建築士は、風水の世界を理解しようとしないのでしょうか。

スピリチュアルと科学文明。

このどちらかに偏った考え方が、両者の融合を妨げているように思えてなりません。

これからの空間は、もっと「感性と機能」が調和し、人と共鳴するものになっていくはずです。

AIが進化し、スマートハウスが普及しても、最終的に人が心地よいと感じる空間には「氣」が流れているのです。

だからこそ私は、この分野の未来を若い世代に託したいと思っています。

科学とスピリチュアル、理性と感性の両方を扱える人。

「相 × 法 × 創」の感覚を持った風水建築士たちが、

これからの時代の空間に、新しい命を吹き込むことを願っています。

## 0-6 科学とスピリチュアルの融合へ

風水は迷信ではありません。

自然法則に根ざした理論であり、曖昧な思い込みに基づくものではないのです。

確かに古代の知には限界がありました。

観測技術もない中で、先人たちは直感と経験で自然と向き合ってきたのです。

現代の視点で見れば、いくつかの考えには誤りもあるかもしれません。

しかし、それを一概に否定し、すべてを迷信と切り捨てる姿勢には違和感を覚えます。

そこには、自然に向き合い、世界の法則を探ろうとした人類の長い探究の歴史があるのです。

そして、科学もまた万能ではありません。

すべてを説明できるわけでもなく、人の感情や無意識までは捉えきれていないのです。

量子物理学では、「観測によって現象が変化する」という知見が示されています。

物質と意識、空間と情報のあいだには、見えないつながりが存在する可能性があるのです。

これは、風水が古代から語ってきた世界と驚くほど一致します。

氣、陰陽、五行、方位、地形──

それらは単なる用語ではなく、自然と人間をつなぐための環境設計の思想です。

多くの人は、科学とスピリチュアルが対立するものだと考えていますが、私はそうは思いません。

両者は本来、補い合う一対のものです。

古代の人々は空を見上げ、地を読み、氣の流れを探りました。

それは天文学であり、哲学であり、医学であり、風水でもありました。

現代の科学は、数値と論理で自然を解明しようとします。

しかし、量子の世界では、物質の背後にある意識や情報の重要性が再び問われ始めています。

私は風水を、科学と未来をつなぐ「橋」にしたいと考えています。

風水は、ただの開運術ではありません。

それは、「氣の科学」へと向かう思想と感性のプラットフォームなのです。

科学の進歩の陰には、常に見えないものを信じた人たちの直感と想像力がありました。

アインシュタインも夢を語り、量子物理学者たちは意識という未知の領域に踏み込みました。

科学の発展は、スピリチュアルな問いかけとともに歩んできたのです。

風水もまた、そうした対話の場に戻っていくべきだと思っています。

私の仕事は、単に設計図を描くことではありません。

氣が通う空間に、「設計図を超えた意味」を与えることです。

この書は、「相 × 法 × 創」という立場から、風水を単なる伝統ではなく、これからの技術へと橋渡しする試みなのです。